倉嶋　厚

暮らしの気象学

草思社出版，1984年11月，
265頁，1,300円

柏市で生涯教育の一環として，1984年後半に教育委員会主催で，気象大学校開放講座が開かれた．その時の「気象と地震の話」に対する受講者の目には光り輝くものがあった．現在の情報化社会に伴う生活環境の変化というか，生活行動の規範を消失した現代においては，各自が生きがいを身につけていかねばならない．それは年老いてからではなく，幼い時から一生を通じて行うべきもので，民主的であり，かつ個性的でありたい．そのすばらしい対象は自然であり，その中でも“活きている”自然現象すなわち気象・地象・水象ではないだろうか．

そんな自然現象の一部を「ビックラ気象学」と題して書き出したのがこの書物であり，書評依頼が偶然にも，上述の開放講座の最後の日の寸前に送付され受講者に勧めることができた次第である．著者はNHKのNC9のお天気おじさんとして有名で，昔，席を共にしたことがあるが個性的でユーモアを備えた人好きのする方である．謙虚さと思いやりと，少しのユーモアは生涯教育の基本であり，暮らしの間（調子）でもある．著者は自然をこよなく愛し「季節の移り変わりに敏感で大空の美しい一瞬」にほれる人で，「職業の選択は見合結婚だったが，その後恋愛が始まり続いている」とも書いている．

著者はニュースの中で天気予報が当たって欲しいと願望を表すことがあるが，大気現象において，理論・実験・情報科学をフルに活用したあとの願いは常に必要であり，すがすがしさを与えてくれる．「当たらない天気予報」の項で「関係者のあせりをよそに天気予報は別の次元で今後もはずれるだろう．しかし……はずれの原因がわかってきた……」と論じている．著者がこの文を書く四年前に，気研ノートで「数値予報の精度の向上は特効薬的には天気予報の向上に結びつかない．向上のための提案の一部として，目的別予報，実況主義，ユーザーへの知識普及」などを上げているが，その知識の普及を花を見る余裕としつつ書いている気がする．生活の中流階級以上を自認するためのトップの条件は，精神的ゆとりがあるかどうかだというが，日本人は自然の移り変わりを見るゆとりを一番持っていたはずではなかろうか．

全体として見直すと，1. 気象歳時記，2. 私と天気予報，3. 気象のカルテ，4. 異常気象はなぜおこる，の四章に分けて書かれているが，昭和42年から59年までに新聞や雑誌に投稿したものの一部を編集したもので，月の虹あるいは夜の虹など重複しているところもあるが，光の春など興味あることばにふれ，空の扁平はなぜかなど多くの現象を的確に説明している．書き出しでSpring（春）のバネで弾力をつけ，俳優や歴史上の人物も登場させ，二十四節気の「賢者は物事の盛りの絶頂にあって，そのかすかな衰えをいち早く感じとる必要がある」と共感させ，どんどん読書欲をつのらせてくれる．しかし，全体としては少し固苦しさを否みえない．一頁の行数が多すぎることもあるが，季語を非常に多く活用するからだろうか．著者は，「じっと空をながめていた時は……いずれも哀しい時か，しみじみとした静かなうれしさだった」と書いているが，私は59年1月に大脳手術を受けて2カ月の入院生活を余儀なくされた時にも空は友であり魅力と活力を与えてくれた．大雪を伴う異常寒波であったこともあるが，助かったという喜びと共に感謝の念がみなぎっているのである．しかし著者も「雲のいろいろ」で「空の美しさとしくみを知ると……人生の楽しみが一つ増えるはずである」と語っている．また，「ビーナスの汗」「モンロー風」「快感帯」などと気象現象を示し，更に「妻と一緒の実験」を通してエッセイに変化をつけ終始楽しませてくれる．

最後に，一言希望を述べると，小さいものでもよいが索引（人名別・用語別）が欲しかった．エッセイではあるが，気象資料を多く用い歴史資料を引用し気象現象を説明し，例えばキラーストームのゲリラ型分類，また学者の言，例えば藤原咲平博士の十二ケ条教訓など，更に多くの季語などを読みとばすには惜しいし，暮らしに役立つものが数多く掲載されている．なお，索引の必要性は一般気象学関係書物についても言えることではある．また，愚案ではあるが，装丁なども一工夫欲しかった．

（池田　学）